

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.1 セメント美術とは

本稿はこのたびのコンクリート新聞社のホームページのリニューアルに伴い、筆者が執筆した連載「研究者と巡るセメント美術」の記事を改稿し、ウェブ版として改めて掲載するものである。同連載はコロナ禍による中断を挟みつつ、2019年11月から2024年8月の間に、合計31回にわたって『コンクリート新聞』に掲載した。同連載の絶対的な条件は作品の所在地に実際に足を運び、自身の眼で作品を鑑賞すること。したがって、ウェブ版で2回目以降の記事で紹介する作品は、すべて筆者が現地に赴いて取材したものである。1回目の記事となる本稿は、セメント美術について再確認する場としたい。

セメント美術とは、セメントを主原料とする作品、および作品の制作活動を意味する。セメント芸術、コンクリート美術、コンクリート彫刻などと呼ばれることもあるが、素材がモルタルやコンクリートの場合でも、より包括的な概念であるセメントを用いて、セメント美術と称することとしたい。

筆者はセメント美術の研究者である。これまで本格的な先行研究が存在せず、数年前までは耳慣れない言葉であったセメント美術だったが、ここ数年の筆者による地道な啓蒙活動のおかげで（？）、筆者が身を置く美術史研究の世界でも、ずいぶんとその認知度が上がった気がする（もっとも筆者の思い違いかもしれないが）。本来は土木建築素材であるセメントが「美」の表現活動である美術とどのようにして結び付いたのだろうか。セメントが接合材であるだけに、両者の結び付きを考えるのは面白そうだ。

19世紀前半に特許が取得されたポルトランドセメントは、幕末期に日本に伝来し、建築や土木の分野が中心に使用されたが、20世紀初頭（明治30年代半ば）に美術素材としての応用が始まった。近代日本における最初期のセメント美術の作品として挙げられるのが、噴水彫刻である《楊柳観音》（図1）と《龍女神像》（図2）。東京美術学校（東京芸術大学の前身）が1903（明治36）年の第五回内国勸業博覧会に出品した作品だ。常に水に触れる噴水彫刻であるため、耐水性の高いセメントが素材として選定された。同作でのセメントの選択の裏には、苦い前例があった。実は1895（明治28）年の第4回内国勸業博覧会に出品された噴水彫刻が耐水性の低い石膏で制作されたため、開催期間中に水でボロボロに崩れてしまい、見るも無残な姿を晒してしまったのであった。

美術素材としてのセメントは、関東大震災後の鉄筋コンクリートブームを背景としてどの利用が本格化し、昭和戦中期には金属不足を補うための代用素材としてセメントの需要がますます高まり、セメントの美術的応用と作品制作を研究するための寄付講座として、「臨時セメント美術教室」が東京美術学校に設置されるに至った。

戦後は小野田セメント株式会社が協賛する形で、1951（昭和26）年から日比谷公園などの野外の公共空間を会場にした野外彫刻展が開催され（主催は東京都）、数々のセメン

ト彫刻が展示され、一般の人々がセメント美術に接触する機会が格段に増加した。令和になっても、セメントは美術素材として使用されている。

このように日本でのセメント美術の歴史は、実に120年以上になる。しかしながら、セメント美術は、日本におけるメジャーな美術素材（木材、金属、石材、陶土など）の陰に隠れ、これまで美術史研究の対象とされることがほとんどなく、無視されつづけてきたのが実情である。長きにわたり等閑視されつづけてきたセメント美術に光を当てようと思い立ち、筆者はセメント美術の研究を約10年前から開始した。

次稿からいよいよ本格的に多種多様なセメント美術の作品を紹介していくが、灰色の無機質な接合材というセメントの従来のイメージが一変すると、筆者としては非常に嬉しく感じる次第である。



図1 楊柳観音



図2 龍女神像